

宮城県透析施設間連絡網の歴史

宮城県腎臓協会 災害対策ワーキンググループ 多賀城腎・泌尿器クリニック 秋山勝俊

昭和53年6月の宮城県沖地震は、M 7.4 震度5の地震であったが、津波は発生せず、死者27人中、ブロック塀や門柱の崩壊による死者が18名、負傷者10,962人であった。また、ライフラインの停止、機器の破損により、日本の透析施設が初めて経験した大規模地震であったと思われる。その後、コンソール・供給装置の固定方法や配管のフレキシブル化、いわゆる赤塚先生の提唱する災害対策の4つの原則や、離脱、避難方法・透析手帳など施設毎に準備するなど、主に災害発生時に被害を出さない対策が震災対策の中心であった。



耐震固定



フレキシブルホース

しかし平成15年に起こった宮城北部連続地震では、電話回線使用不能状態で情報収集困難を経験した。

平成15年7月 宮城北部連続地震

26日午前0時13分 震度6弱 M 5.5
26日午前7時13分 震度6強 M 6.2
26日午前10時22分 震度5弱 M 4.8
26日午後4時56分 震度6弱 M 5.3

その為平成17年に宮城県医師会の主導にてMCA無線が導入され、同時期に県内の透析施設にも普及したが、医療施設間や透析施設間といった組織的な連携訓練は行なっていない中で、平成20年6月14日(土)午前8時43分M7.2最大震度6強の岩手・宮城内陸地震が発生した。透析施設に大きな被害は無かったが、情報収集のルールが決まっておらず、一度に多量の情報が集中し混乱が発生した為、平成20年9月1日 宮城県腎臓協会の災害対策ワーキンググループが結成され、下記の項目が決定された。

- ① 地理的要因を元に県内を5つのブロックに分け、地域内での拠点施設を決める。
- ② 最終拠点施設をJCHO仙台病院とし、「最終拠点施設→地域拠点施設→地域内」の各施設のトップダウンによる情報収集をするとのルール

また平成22年3月第1回 宮城県透析施設間MCA無線伝達訓練を行い、その問題点や反省点を改善し、

同年5月 第2回の宮城県透析施設間M C A無線伝達訓練を実施、平成23年5月にF A XやEメールなども使用し、県内全透析施設参加の情報伝達訓練を行う予定であったが東日本大震災が発生し実施出来なかった。

大震災を経験し、震災前は主に地理的要因を考慮したブロック分けだったが、震災時は災害拠点病院が中心となって活動した事を踏まえ、災害拠点病院を中心としたブロック分けに変更し再構築を行った。

